

〈基調講演〉

「“尾駁の牧” “糠部の駿馬” をめぐる

人・物・情報の交流について」

東北大学名誉教授・(現)一関博物館館長 入間田 宣夫

1 延久2年(1070)、北奥合戦、閉伊七村山徒、衣曾別島荒夷

それでは、「延久2年(1070)、北奥合戦…」ということなんですけども、これは、簡単に申しますと、〔図①〕に、その図面がありますけども、1070年、延久2年以前の平安時代の遺跡の図面にはですね、秋田県の男鹿半島、あるいは岩手山の辺り、それから三陸海岸でいうと、宮古と遠野のなんかも、釜石の辺りまで含めて、線がこういうふうになってますけれども、これを大雑把にいうと、“北緯40度線”って言うんですよね。

日本の学界ではずう〜っと、戦後この方いろいろ議論して分かってきたことなんですけれども、この“北緯40度線”から北側の世界、つまり現在の青森県よりの一部と、岩手県の一部を含む地域と、北海道・道南の地域っていうのは、むしろ同じような共通の文化圏で、それでむしろ、“北緯40度線”からの南側の日本国とは違う文化圏、あるいは経済圏、そういう世界だったということが議論になってきたわけです。

それが、延久2年(1070)の北奥合戦がありまして、日本国の軍隊がこの“北緯40度線”を越えて、現在の青森県、あるいは三陸、あるいは北海道の道南まで攻め込むんですね。その結果、津軽海峡の辺りまで日本国の中に組み込まれて、今日の我々の知っている歴史の土台がつくられるわけなんですけども、それまでは、全然別の世界だったわけです。それが、今日のお話の大前提になります。

それに関する史料が、〔史①〕です。上の段が3年の5月5日、その下が応徳3年という二つの史料〔史②〕があるんですけど、簡単に、傍線を引いたところだけ読んでみますと、延久3年、1070年に、日本国側の軍隊が荒蝦夷(あらえみし)、つまり“北緯40度線”の北に住んでいる蝦夷が兵を起こして大騒ぎになったので、日本国側から軍隊を派遣して、彼らをもとに追い込める。つまり本拠地まで追いつめて、あるいはその首を獲り、あるいは生きながらからめ捕り、征服をした。



【図①「北の防御性集落遺跡分布図」】

それから、その下の段に、「四五二」って番号が付けてありますけど〔史②〕、その攻め込んだ場所はどこかといいますと、「衣曾別島(えぞがわけしま)」。つまり北海道の道南、そこに住んでいる荒蝦夷。それから「閉伊七村」。今の宮古とか、釜石とか、あるいは久慈とか、あの辺りに住んでいた七つの村に住んでいた、「山徒」というのは、“山賊ども”という悪い言い方なんですけども…。

本当は、海岸に住んでいますから、むしろ海賊と言った方がいいと思うんですけど、当時、日本国の根拠地があった多賀城とか、あるいは岩手県の胆沢城辺りから見ると、陸中山脈を越えた山の彼方のずう〜っと向こう側に、今の宮古やあるいは閉伊や、釜石やあるいは遠野がありますから、山の中の、さらに山奥の人たちと映ったんですね。

ですから、今の岩手県の北側、東北縦貫道路通りに、“七時雨(ななしぐれ)峠”という峠がありますけども、そこを越えて津軽方面に攻め入った日本国の軍隊が、一方では、海峡を渡って北海道道南まで。それから一方は、こっちの一戸、二戸の方面から八戸へ、さらに南下して、久慈から宮古へ行くという、大きな征服戦争がありまして、その結果、日本国は津軽海峡まで広がった。

そして、そこに住んでいる人たちも日本国の中に組み込まれるということになります。

2 北緯 40 度線によって区画される北奥世界

「北緯 40 度線によって区画される北奥世界…」っていうのは、独自の文化圏でありました。普通、日本の文化というのは、何となく、京都の方から中部地方・関東地方、それから東北地方の南の方、宮城県・岩手県と来て、最後に青森県と…。西の方から順番にやって来たと思われることが多かったんですけども、最近は、そうではないということが分かってきました。

むしろ、岩手県とか宮城県とか、関東地方よりもずっと早くに、むしろ京都方面あるいは九州方面から西の文化が、最初に津軽に来るんですね…。で、それから、津軽から南下して、今の鹿

四二六 追討人隨_レ後仰_二可_レ參上_一宣旨
左辨宣下 陸奥國
應_レ隨_二後仰_一參上_二守源朝臣賴俊_一事
右得_レ彼國去十二月廿六日解狀_一、謹檢_二案内_一、當國多年之間、諸公事之輩雖_レ有_二其數_一、始_レ自_二散位基通_一、至于其次々、尋_二訪泉惡之者_一、悉_レ令_二追討_一既了、又_レ遣_二發兵_一、黎民騷擾、然而或_レ迫_二龍本所_一、或_レ斬_二取其首_一、或_レ乍_レ生擄得_一、於_レ今者當國無_レ爲_レ無事也、加之筆端有_レ限、存略之間、朝城雲隔、非_レ無_レ疑殆_一、件荒夷等首并生獲者、以_レ使_レ令_レ參、定爲_レ後代之謗_一哉、然則守賴俊隨_二身件首并生獲輩_一、早_レ可_レ參上_一也、而當國爲_レ弊、十月以後寒氣殊甚、風雪無_レ際、無_レ在_レ還之者、動失前途、雖_レ企_二早參_一、因_レ茲_レ遲怠、於_レ今者、相_レ待_二明春_一可_レ參_二洛也_一、
〔中略〕
延久三年五月五日 〔二〇七二〕
檀中辨藤原朝臣 大史小槻宿禰
〔朝野群載卷第十一〕

【史①「延久 3 年 5 月 5 日条」】

四五二 前陸奥守從五位上源朝臣賴俊誠惶誠恐謹言
請_レ特蒙_二天恩_一、任_二先朝給旨_一、依_二衣曾別嶋荒夷并閉伊七村山徒討隨_一拜_二任職_一岐國關上狀
右、賴俊去治曆三年任_二彼國守_一、著任之後、廻_二治略二期_一與復、挾_二野心_一俗不_レ憚_二朝憲_一、然而王威有_レ限、即_レ討_二隨三方之大_一、其間無_レ國之費、注_二子細_一言上之日、被_レ宣下_一、云_レ旁勅_二知_レ勅_一邊鎮、事不_レ可_レ默者、捧_二件宣旨文_一參洛之處、清原貞衡申請拜_二任鎮守府將軍_一、爲_二大將軍_一賴俊、于_レ今不蒙_二朝_一、
〔中略〕
應德三年正月廿三日 前陸奥守從五位上源朝臣賴俊
〔二〇八六〕
〔平安遺文九の四六五二號文書〕

【史②「應德 3 年正月 23 日条」】

角、あるいは比内一帯や大館や、鹿角市辺り、そして一戸・二戸・三戸、こっちの方に来るので、津軽が最初の出発点なんですね。

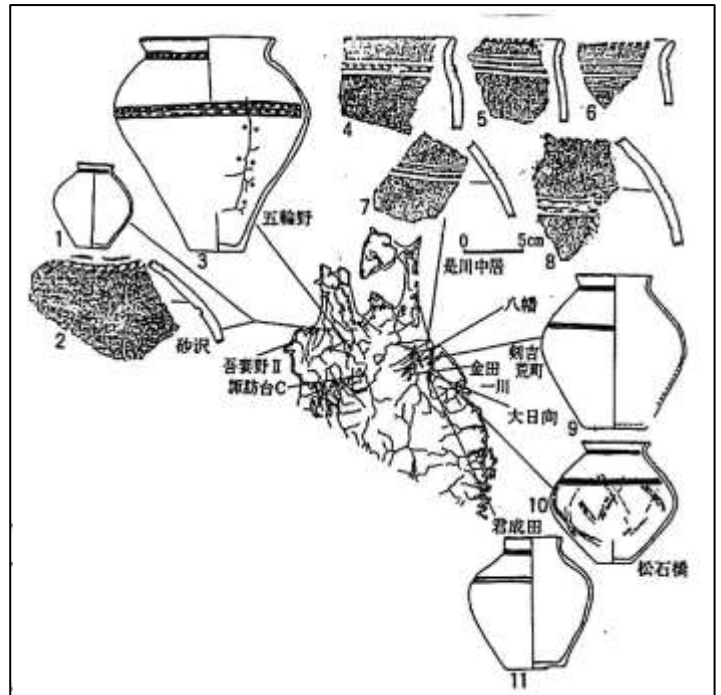
それを簡単に、印象的に示した絵図〔図②〕がにございます。「東北地方における遠賀川系土器の分布」という須藤隆さんの論文から引用してありましたけれども、「遠賀川」というのはですね…。九州の福岡県の辺りを流れている川で、あの辺りで日本で最初に稲作が始まったんですね。弥生時代の…。ところが、そこで稲作が始まったとほぼ同じ、さほど隔てない時期に、いきなり津軽に稲作の文化が入って来て、そこで使われている土器も遠賀川。つまり、九州の遠賀川辺りに発掘された土器と同じようなものがです。津軽から、さらにはこっち側の一戸とか二戸とかへ、ずう～とこういうふうに広がって来ているということが分かっております。

ですから稲作は、南から順番に北へと広がって来たのではなくて、むしろ津軽から、北から南へ広がって来るとということが分かっております。

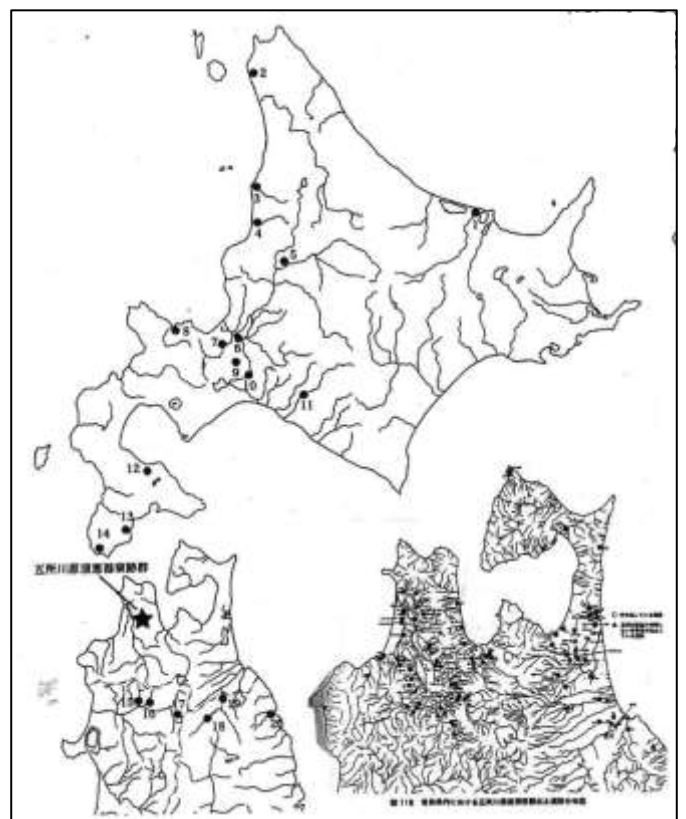
あるいは、次の五所川原系須恵器って話なんですけども、五所川原市教育委員会の報告書に載せられた〔図③〕を見れば分かりますとおり、五所川原っていうのは、太宰治が生まれた津軽ですけれども、あそこでは、9世紀・10世紀ぐらいの時期に五所川原産の須恵器という特別の器が作られまして、その写真はですね…。次のページに写真〔図④〕が載ってますけど、こういった須恵器、これが五所川原で作られたものなんですね。

それが海峡を渡って、北海道の全域に、それから津軽から大館、あるいは鹿角市の辺り、さらには一戸・二戸、あるいは久慈の方へというふうに広がるんです。けれども、そのいわゆる北緯 40 度線を越えた南側の方、岩手県の方には広がらないですね。七時雨峠というバリアがありまして、そこから広がらないんです。

あるいは、図面がありませんでしたけれども、津軽辺りで盛大に製鉄をやりまして、つくった鉄を北海道方面にどんどん輸出する…。製鉄に使う砂鉄については、六ヶ所村の辺りの浜から採



【図②「東北地方における遠賀川系土器の分布」】



【図③「青森県外の五所川原須恵器出土遺跡分布図」】

れた砂鉄が、津軽に運ばれて行って、津軽の製鉄の現場で使われているという話を伺いました。やっぱり津軽中心の、そういった体制ができています。

あるいは、「防御性集落」。あるいは、今日の話で言えば「囲郭集落」という…。もう一度、斉藤利男さんの作った〔図④〕を見て頂きますと、今日お話し頂いた、野辺地の辺り、あるいは三沢の辺りを含めて、この10世紀、11世紀、12世紀初頭ぐらいの…、溝であるいは堀で囲まれた、特殊な集落という



【図④「五所川原須恵器(杯・壺・鉢)」】
〔『古代北方に生きた人々—交易と交流』展示図録 2008〕

のが、この分布図を見れば分かるように、ほとんどが、言わば北緯 40 度線の北側、あるいは北海道の道南に位置します。つまり、海峡を挟んで共通のそういう文化圏があったわけですね。

それからさらには、「板碑(いたび)」という、これは平泉が滅亡した後、鎌倉幕府の時代なんですけれども、関東地方から、死者を供養するための供養塔として、板状に割った石を建てるといふ供養塔。それが鎌倉時代、関東地方から全国に広まるんですけれども、その広がり方もすごくおもしろくて、東北の宮城県辺りには伝わって来るんですけれども、そこから順番に、岩手、青森と行くんじゃないかと、いきなり津軽に行くんですね。で、津軽から同じような形で、鹿角、あるいは比内、あるいはこっちの戸へ来ます。

それに対して、北上川をさかのぼって、宮城から岩手へ行った「板碑」文化の流れは、やっぱり七時雨山の峠のところでピタッと止まるんですね。だから、民間のいろんな物流の例で言うと、その北緯 40 度線の南側の物流のエリアと、それと北側とは全然別の動き方、物流のあり方を示しているというふうに言えるのかなあ〜と思います。

3 「奥大道」と「七時雨峠」

それでは、〔図⑤〕を見て下さい。

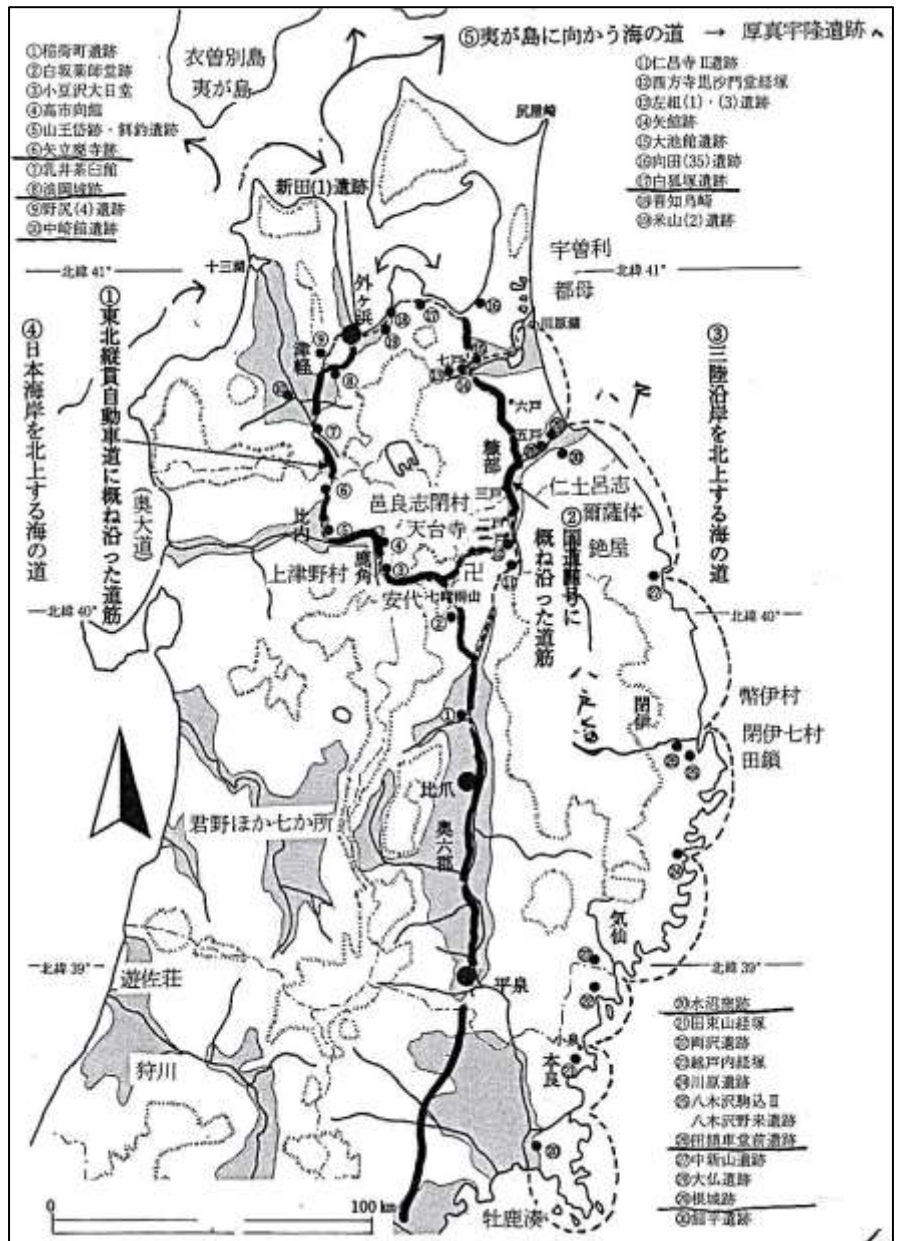
じつは最近ですね。考古学の研究がすごく盛んになって、10年前、あるいは5年前の常識さえくつがえるようなことが、次々と分かってきております。それで、私の参考文献、後ろの方にありますけれども、例えば、私が書いた「清衡のグローバル・スタンダードと仏教的・商業的人脈」という論文とか、あるいは、鈴木琢也さんの「平泉政権下の北方交易と北海道在地社会の変容」、あるいは、羽柴直人さんの「奥州藤原氏時代の北奥への交通路」、あるいは、八重樫忠郎さんの「東北の経塚と厚真町の常滑壺」というのは、雑誌（『歴史評論』795号）に収められている論文なんですけれども、この中に、最近の考古学研究の成果が集約された感じで載ってまして、その中の羽柴さんの論文にあった図面を、私なりに少しアレンジしたものが、〔図⑤〕なんです。

元々、北奥世界というのは、津軽をセンターとする独自の物流を持っていたということを申し上げたんですが、それが政治的にいうと、1070年(延久2年)の「北奥合戦」。それと前後する辺りから、だんだんと日本国側とつながる物流のルートがつくられてまいります。

それについて見て行きますと、たとえば、陸上ルートで言いますと、この太い線で分かりますように、「奥大道(おくだいどう)」という、今でいう東北自動車道をずうっと岩手県から北上しますと、②番のところに「七時雨山」って山がありますけれども、それは今でも東北自動車道の最高地点で、ちょうど北緯40度線にあたるんですね。その峠を越えると安代、そして秋田、それから最後の青森市域まで来るようなルートがございます。

それから、七時雨峠を越えて安代のところから、八戸道っていう道路もありますよね。あれで、八戸市の方へ向かうんですけども、ほぼ、それに沿う形で、一戸、二戸、三戸、四戸、五戸、六戸、七戸で、で、野辺地で行き止まりですけども、そこから折り返して来て、八戸。そして、その南側の九戸っていうようなルートができ上がります。

これが、大体、1070年以



【図⑤「北奥への交通路と関連遺跡、地名(羽柴直人原図に加筆・訂正)」】

降の正式なルートとなります。ですから、このルートを通して、多賀城なんかのお役人たちなども、青森県域の方に入って来ます。あるいは、このルートが正式にでき上がる以前もですね、こういったルートの元になるような道を通して、青森県域の、さっきご紹介があったようないわゆる環濠集落、あるいは囲郭集落に住んだ有力者なんかのところに、個別にいろんな人がやってきたり、あるいは、そういう人に伴って、いろいろなお土産代わりにいろいろな物が配られたりとかしたのですね。

4 「日本海岸を北上する海の道」と「太平洋沿岸ルート」

ところが、それに対してですね、海上のルートというのがあります。むしろ、こっちの方が民間ベースで、物流の一番、大事な役割を占めていました。例えば、日本海サイドにずうっと行くルート。〔図⑤〕で言えば、④番の「日本海岸を北上する海の道」って、これは九州、あるいは

京都、あるいは山形、秋田方面から西回りで、現在の津軽に入って来る、こういう道。海上の物流ルート。これが、ものすごい大きい意味を持って、さらには、これが津軽海峡を渡って北海道、道南方面に行くという、このルートがありました。

それからもう一つは、これは、ごくごく最近になって分かって来たことなんですけれども、太平洋沿岸。太平洋沿岸と言いますと、波が荒くて、海も荒れて、なかなか大変で、正式にこういうルートができ上がるのは、江戸時代じゃないかという話が昔はあったんですけど、最近の考古学の発掘成果などによるとですね、確実にもう 12 世紀に、あるいはもっと前から、宮城県の水巻の辺りから、三陸海岸を北上して、今で言えば宮古、あるいは久慈。で、八戸、そして、小川原湖のところまで来ますとね、そこから、尻屋崎を回って津軽海峡に入るってのは、なかなか難しかったみたいですね。

実際に発掘成果を見てみますと、小川原湖から、内陸に入って七戸まで物を運んで、七戸から野辺地。野辺地湾から海峡に出て、北海道の東の方へ行くという…。

例えば、その証拠はいろいろあるんですけども、一番有力なのは、〔図⑤〕の下の方の⑩番の「水沼窯跡」。実は、この水沼ってところに、東海地方の愛知県の「渥美焼」という、向こうの焼物の、その技術集団を直接呼んで来て、平泉の藤原氏が、水沼の水沼ってところで焼物をつくらせるんですね。

それがですね…。同じようなものが宮古のところの閉伊の「田鎖車道前遺跡」とか、あるいは、さらにはですね。ずう～っと行って小川原湖から七戸に出て、野辺地の先の「白狐塚(びゃっこづか)遺跡」まで。そこに、そういう宮城県水巻の水沼地区の置物が運ばれているんですね。

あるいは、それと一緒に東海地方の常滑(とこなめ)の器とか、あるいは中国の白磁・青磁とか、そういうものが太平洋沿岸を通して、ずう～っと小川原湖まで行って、七戸から野辺地、そして野辺地から海に出て、北海道の道南の厚真(あつま)という、苫小牧の先まで行くような、そういうルートが見つかっている…。

ですから、これは少し、マニアックに学問的な話になりますけれども、ちょっと前迄はですね。平泉・藤原氏の時代には、東北地方の物流ってのは、平泉が掌握してて、何でもかんでも平泉を通さなければいけなかったというふうな話があって、今でも学界ではそれが主要な意見になっているんですけども、今のような図を見たらですね、とってもじゃないけれども平泉がこういうルートを全部、掌握しているなんて思えないですね…。

むしろ、日本海岸を通る船の海路にしても、あるいは太平洋沿岸の海路にしたって、藤原氏なんか付け入るシマもないというような感じですね。すなわち、藤原氏が介入できた物流のルートというのは、奥大道を通して、七時雨山峠を越えてくる陸路だけだったのではないのでしょうか。

5 「七時雨峠」と「文明の十字路」

奥大道について、もう一度言いますと、この道が開ける以前から、北方世界にはですね、津軽発、比内・鹿角、あるいは一戸、二戸へつながる道は元々あったので、それに、七時雨峠を越えて南方から接続したっていうのが、実は「奥大道」の姿なんです…。

そのようにして、平泉への道ができると、ちょうど安代ところが、今でもジャンクションが

ありますけれども、あそこが、北奥羽最大の「文明の十字路」。交通の要所になるんですね。不思議なもんですね。現代の高速道路の分岐点、北奥羽最大のそれが、当時からやっぱりこういう格好で存在していた…。そういうことが分かるんですね…。

でもですね…。七時雨山を越えて南下したものというのは、陶磁器、重さのかさばる壺とか甕とか、民間ベースの商人が運ぶようなものではなくて、極めて特別な物に限られていたのです。北海道産の鷲の羽、水豹(あざらし)の皮、あるいは希婦の細布というのは、これは鹿角で採れる鳥の羽を織り込んだ麻布、あるいはこれからお話をする一戸～九戸産の馬とか、要するに、かさばらないで、峠を越えても持ち運べるような軽い荷物、「軽物」といって、重くない軽いもの、言わばそういうものが越えて行くんですね。

ですから、物流の多くは、民間の交易でのルート、おそらく、むしろ海路であります。

例えば、青森県域で発掘されて出てくる中国産の陶磁器の類いとか、あるいは東海産の陶器、石巻の水沼産の陶器等々は、やっぱりどっちかと言えば、太平洋沿岸の海路を通して、あるいは日本海岸のルートを通して運ばれてきたのです。能登辺りで大量に生産された珠洲の須恵器が、日本海を経て運ばれてきたことはもちろんです。

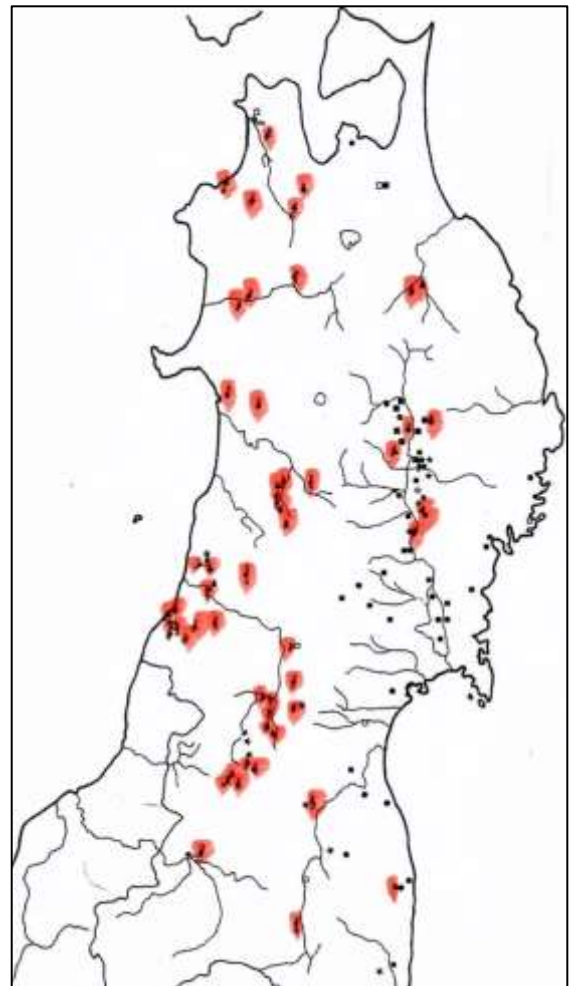
それを裏付けるのが〔図⑥〕。これは、八重樫さんの論文、「東北地方の経塚と墳墓」という中にあります。これを見ると、赤で印を付けてあります。

これは珠洲産の須恵器が運ばれてきた遺跡です。その製品が新潟県、あるいは山形県、秋田県、そして青森県まで運ばれている…。そして青森県の津軽に上陸したそれが、さらにですね。内陸のルートを通して、こちら側の一戸、二戸まで行きます。あるいは、米代川とか、雄物川とかを通して運ばれます。

反対に、東海地方の常滑とか、渥美とかは、太平洋の沿岸を通して運ばれてきて、〔図⑥〕(「東北地方の経塚と墳墓」)の「●」「■」のマークです。福島県域ですとか、あるいは北上川流域、あるいは陸前高田市、あるいは宮古ですね。一番上の野辺地のところにある「●」印が付いているのは「白狐塚遺跡」です。

なお、平泉界限で若干、日本海系の遺物が出てきますけれども、珠洲焼とかですね。しかし、これは、壺そのものが目的じゃなくて、壺の中にいろんな薬とか、めずらしい品物を入れて容器として、山越えて日本海側から奥羽山脈越えて運んできたようなものなので、壺そのものが大量に見つかっているわけではないですね。

ですから、民間の物流は、津軽について言うと、ほとんどが日本海ルート。それが北海道まで行くということです。それから、太平洋沿岸の福島、宮城、岩手、そして、小川原湖から野辺地湾、さらには道東というのは、太平洋のルートなんですね。



【図⑥「東北地方の経塚と墳墓」】

それならば、我々が「交易」という時には、日本海ルートのもの動きと、太平洋の方のもの動きと、それから七時雨山峠という奥大道を越える、特別なもの動き。その三つをですね、きれいに分けて、たとえば、糠部から産出した馬とか、どのルートを通って平泉方面に、あるいは、どのルートを通って京都とか鎌倉方面に運ばれて行ったのかっていうことを、一々検証しないといけない。すなわち、一つひとつ、もの動きをたどって具体的なルート考えなくてはならないというような状況に、なっているかなっていうふうに思います。

そういう点で言うと、午前中の緑釉陶器の話っていうのは、私にとっては衝撃的で、逃げて帰ろうかと思ったぐらいなんです…。(笑)

よく考えてみると、未だにもって答えは出ないんですけども、ポツンと、いきなり京都風の緑釉の器とか、あるいは、いきなり近江とかの器が、出てきているっていうのは、どんなふうに考えたらいいか？

もっとも今日のこれからのシンポジウムで、そこを一番考えたいわけなんですけども…。むしろ、今のうちに、私の意見を言っておきますと、でも、その緑釉と一緒に、じゃあ、東海産なり日本海系の遺物なりが同時に出土しているか？っていうと、なかなか出て来なくて。出土しているのは、むしろ五所川原の、津軽のそういうものが一緒に出たりしているわけですから、どうも緑釉っていうのは、お話の一部あったんですけど、京都から派遣されたお役人なんかを持ってきたのではありませんか…。民間ベースの太平洋沿岸とか、日本海沿岸のそういうルートではなくて、峠越えの、奥大道のルートによってね、こっちにやってきている、お役人とかに来たものなのかな？…と。

奥大道ができるのは、正式には1070年以降なんですけども、その前から、そういうふうに、安倍富忠とか、いろんな格好で、日本国側とつながる現地の有力者がいましたから、個別にですね、交易とは別の形でのルートで、来ていたんじゃないか？っていうふうに考えたいところあります。でも、本当にどうなのか？は、分からない問題ではあります。

それと、それからもう一つ。羽柴さんの論文には、太平洋の沿岸をこうやって来て、小川原湖まで来ると、そこから尻屋崎を回って津軽海峡に入るのはものすごく大変なので、小川原湖に入って、上陸して七戸。そして、どうなのでしょう。野辺地へ行くっていうルート。さらには、野辺地湾からまた北海道へってことを言ってるんですけども…。

私は、明日辺りに、相内さんにご案内頂いて、小川原湖の辺りを歩いてみたいと思います。そして、海から小川原湖に入ってくる古い入り口はどこか。そして、陸に上がって七戸まで行く…。さらには野辺地へ行ったルートはどこかということ、どうしても知りたい。皆さまのご意見を聞かせてください。

6 「商人の首領、八郎真人」

民間の物流の担い手というのは、何てたって商人なんです…。むしろ商人とか、あるいはそれに結びついたお坊さんたちが、いたるところで経塚を造ったり、あるいは、それぞれの領主に取り入って、いろいろなものを売りつけたりするようなことをしています。その商人の、当時の姿を描いているのが、史料〔史③〕です。

11世紀の中ごろ、ちょうど安倍氏とか清原氏とかが頑張ってた時代の京都の記録（『新猿楽記』）なんですけれども、こうあります…。

「八郎真人は、商人（あきびと）の首領」つまり、日本中を股にかけて活躍した商人の親分なんです。その人が、どういう暮らしをしているかと言いますと、「利益を重んじて妻子を知らず」、「自分の身を大事にして、他人を顧みない」、「一の元手から巨万の富を得る」、「土のようなものを金に変える」、「言葉をもって、他人の心をあざむき」、「謀をもって、人の目を抜く一物なり」。今日の猛烈商社マンの先祖

みたいな人ですね。こういう商人が、もう古代の末期には日本を股にかけて活躍してたんですね。

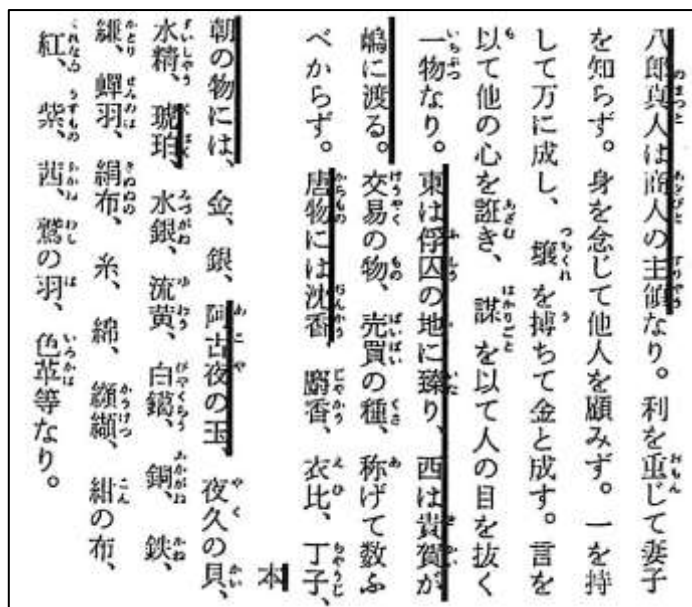
次には、傍線を引いたところ、「東は俘囚の地に至り」すなわち、蝦夷の地。この辺りまでやってくる。「西は貴賀が嶋に渡る」。“貴賀が嶋”ってのは、今の奄美大島の辺りです。あそこには、ヤコウ（夜光）貝という貝が採れる特別の産地があって、そのヤコウ貝を材料に螺鈿（らでん）がつくられています。例えば「中尊寺金色堂」にも螺鈿の技法が採用されているんです。

11世紀の後半になりますと、今の青森県の辺りから奄美大島の辺りに、白磁という中国産の舶来の磁器が姿を現すんですけれども、それは、こういった商人の活躍なんです。

その当時、博多にはですね。チャイナタウンができて、そのチャイナタウンに中国の商人が住みついて、そこに日本人の商人がそこに入り出していて、日本の品物を中国人に売りつけて、その代わりに中国から舶来のを仕入れるんですけれども、その仕入れたものを唐物（からもの）と言いました。唐物の中には、「沈香（ちんこう）、麝香（じゃこう）、衣比（えび）、丁子（ちょうじ）、等々」。その中には白磁もある。

その反対に、中国人に売りつけた、日本産のものには、どういうものがあるかということ、「金、銀」。金は、奥州の金。奥州の金がすごく有名になりまして、それで奥州の王様が金の宮殿に住んでるんだって話が中国に広まり、それが世界に広まるのが“マルコポーロの黄金伝説”ですね。そして銀は、対馬ですね。そして、「阿古夜の玉」って何かということ、これは今で言う、イヤリングに使う真珠のことです。真珠は、当時、日本国内では粉にして薬として飲むぐらいのことしかなかったんです。中国まで持ってくと、べらぼうな値段で売れる…。

あるいは「夜久の貝」。これは、さっき言った、奄美大島の「貴賀が嶋」の辺りから採れる特別の貝。それから、「水精（すいしょう）」は、山梨県の水晶です。また、「琥珀（こはく）」。久慈ですよ…。当時からもうすでに、久慈の琥珀を目当てに商人がここまで来てる…。で、この琥珀を持って行くんですけれども、どのルートを通って、博多まで行ったのか？ これ一、よく分からないんですね。ただ、さっき申し上げたとおり、陸路を通って七時雨峠を越えて行くっていうルートは、琥珀自体は軽い物ですからね、それも可能なんですけれども、ただ当時の商人の圧倒的多数は、日本海ルート。あるいは太平洋ルートを行き来していました。だから、琥珀は、それ自体は軽いものなんですけれども、やっぱり、日本海ルートで博多まで行ったのかなあ～とい



【史③『新猿楽記』】

うふうに思っております。今日は多分、皆さんからいろんなご意見が出るかと思うんですけど、一応、そのように申し上げておきます。

というわけで、今日申し上げたかった一番の中心というのは、平泉藤原氏とかが政治的につくった特別のルートにはあらず。むしろ、活発に動いているのは商人であり、あるいはお坊さんたちであり、その人たちの往来した日本海側ルート、あるいは太平洋側のルートこそが大事だった…。ということでもあります。

これまでの研究では、それぞれの交易品や貢納物が、どのルートを通って行ったかということは、明確に意識されてこなかったのですけれども、やっぱり、そこら辺りまで考えなくちゃならない、そういう時期に来てんじゃないかというふうに思われます。

7 弘仁2年の爾薩体・幣伊村の攻撃計画

元々は、北奥羽の現在の青森県域の辺りは、日本国とは別の世界だったという話をして、それが1070年に、一挙に日本国の軍隊がこの地域になだれ込んで来て、それで日本国の領域の中に組み込まれてしまったという話をしたんですけれども、いきなりと言ってもね、全く何もないところにあつたんじゃないくて、今日の話にあつた防御性集落なんかの、そういうところの親分クラスの人に対して、多賀城なり、秋田城なりの日本国側のお役人が、唾を付けるような、そういう関係が無かつたわけではないんですね…。

そういう唾を付ける関係の中で、緑釉陶器とか、石帯(鉦尾)とかね、あるいは硯(転用硯)とか、そういう威信財とでもいべきものが持ちこまれてきたのかなと思うんですけど…。その史料を紹介します。

〔史④〕です。「弘仁2年7月29日の条」。これはものすごい早い時代に、平安時代に入った辺りに書かれた記録があるんですけど、「邑良志閑村の降俘…」。つまり、日本国側に味方をして、日本国の唾のついた吉弥侯部都留岐(きみこべのつるぎ)っていう地域のリーダーが、秋田城まで行って訴えたんですね。「私どもの敵は、貳薩體村(にさったいむら)の蝦夷の伊加古…」。「貳薩體村」っていうのはどこか?っていうと、

【史④「弘仁2年7月29日条」】

〔図⑤〕を見てください。今の八戸道路の通りで、一戸、二戸、そこら辺りに、手前に「天台寺」ってお寺がありますね。あの辺りに「邑良志閑村(おらしべむら)」っていう村があつて、そこがどうも早くから、日本国側から唾が付いていた。それに対して、「貳薩體村」ってどこか?っていうと、二戸のところに「爾薩体」。すなわち、二戸辺りの伊加古はですね、まだ日本国側の唾が付いてなくて、日本国側と真正面から対抗する人たちだったのです。

そこで、どういう事になっているかというのと、伊加古らはどうしているかっていうと、「都母村(つもむら)」と「幣伊村(へいいむら)」の蝦夷…。「都母」っていうのはどこか?っていうと、〔図⑤〕。三沢の辺りに「都母」って地名がある。「幣伊」ってのはもちろん、その宮古とかです。要するに、三陸海岸沿いの宮古とか、あるいは二戸とか、あるいは下北とか、その辺りはま

○七月廿九日 弘仁二年(八二二)
(後紀) 出羽國奏。邑良志閑村降俘吉弥侯部都留岐申云。己等與貳薩體村夷伊加古等。久構仇怨。今伊加古等。練兵整衆。居都母村。誘幣伊村夷。將伐己等。伏請兵糧。先登襲擊者。臣等商量。以賊伐賊。軍國之利。仍給米一百斛。獎勵其情。許之。

だ、日本国側の唾が付いてないんです。

で、それに対して、七時雨峠を越えてすぐの「天台寺」の辺りまでは、かろうじて唾が付いたという、そういう状態…。そこで、両方の争いが起きて、「邑良志閉村」の蝦夷の方が劣勢に置かれてますので、何とか「我々に手を貸してほしい」と日本国側に訴えているのが、この記事です。

それから次に、その訴えを受けて、弘仁2年に日本国の軍隊が攻め込みます。そこで、文室朝臣綿麻呂っていう、これは教科書に出てくる有名な事件なんですけども、それが日本国側についての現地の蝦夷一千人を連れて、吉弥侯部都留岐をリーダーとして、東の方の「幣伊村」を襲おうとした。ところが結局は、「幣伊村」までは攻めて行けないんですね。今の閉伊とか八戸とか、あるいは下北とかには強力な勢力がいて、ずうっと頑張っている。で、文室綿麻呂は引っ込んでしまって、その後は、北緯40度線以北を日本国側としては手を付けられない格好で、1070年まではそういう状態。

元々の地元のつながりから言うと、三陸海岸沿いに宮古とか、あるいは久慈とか、あるいは八戸、それから三沢の辺り、そして野辺地、あるいは北海道方面につながるルートの方が強い。これは、宮古の博物館で見たんですけども、縄文時代からすでにそうできて、海で魚を採る銚ってのがありますね。銚頭ってのは、縄文時代ですから。鉄が無くて骨で作るんですけども、その銚頭という骨の形がですね、その三陸の宮古で作られた銚とそっくりの銚の形が、北海道でも出てるんです。だから、閉伊郡、三陸海岸のあの地域ってのは、北海道にむしろ近いんですね。

もう一度、図面を見ていただきたいんですけども、〔図①〕ですね。北緯40度線と言いますけれども、まっすぐでないですよ。特に一番南の方の閉伊郡だけが、本当は緯度からいうと、ずうっと南の方なんですけども、日本国の手つかずにいる…。これは、なんでそうなったのかなあ～ということなんですけども、一つは、大量の軍隊が七時雨峠を越えて一戸、二戸、八戸まで来て、そこからさらに南に下るのがものすごく大変で、つまり、今でいう北上山脈を越えて直接海に行けないわけですから、だから、北海道の道南に行くよりもっと大変なところがあって、それで大変。ですけども、そういう事だけでなく、やっぱり今の銚の話で言ったように、元々、この地域っていうのは、北海道あるいは、小川原湖を通して野辺地とか、そういったふうに北につながるような、そういう文化圏を持っていて、だからそう簡単には、日本国側の唾が付かない…。そういうところがあつたみたいなんです。

次に、「爾薩体村夷伊加古等／閉村／都母村、T字型の対抗関係」ということなんですけど、「爾薩体」「閉村」「都母村」と一直線に海沿いに並んでいる…。それに対して、天台寺側から八戸を目指してまっすぐ進むと、ぶつかるでしょ…。それが、「T字型」になる。そういう対抗関係があつた…。その「T字型の対抗関係」というのは、私が初めて言ったことではなくて、私の先生の高橋富雄というある有名な古代史家が仰つたことなんです。

この辺りの勢力関係というのは大変興味深くて、三陸海岸通りに、八戸、あるいは三沢、あるいは六ヶ所とか、あるいは野辺地までつながるような南北のラインと、それから津軽・秋田の方から一戸、二戸、三戸と来るラインがバ～ンとぶつかりますね…。今、四戸の辺りでぶつかるんですけども、やっぱり、そういう地域の成り立ちっていうことがね、実は大きい。だから、それに即して、方々の遺跡から出るいろんな品物の評価も、単に交易で将来されたんでしょという

ことだけじゃなくて、もう少しきちんと考える必要があるのかなというふうに思っております。

8 天喜5年 安倍富忠の挙兵

〔史⑤〕です。これは、現在の岩手県の北上平野に安倍氏という勢力がおりまして、これが中央と対立をして、京都側から源頼義という将軍が派遣されてきて、いわゆる「前九年の役」。今では、学界では「前九年合戦」と言いますが、その時の事なんですけども…。

安倍氏のことを、蝦夷の親分みたいな言い方を、京都側ではしてまいますが、本当はそんなことはない。真実は、安倍氏っていうのは、京都の貴族の安倍氏の末裔なのです。今で言えば、胆沢城に天下って来たお役人の出身…。今でもあるでしょ、県庁なんかに天下って来る、中央のお役人なんかで、その人がやがて、選挙に打って出て知事になるとか、代議士になるなんてコースですね。あれと同じコースなんで…。

したがって、安倍氏っていうのは、現地の“蝦夷の代表”だなんてことはさらさらなくて…。ところが、京都側では、中央の言うことを聞かないような地域のリーダーを、“蝦夷”って言うんですね。

安倍氏関係の遺跡なんか、何ぼ掘ったって、いわゆるアイヌっぽいところなんか一つもなくて、掘れば掘るほど、日本国側と同じく、北陸とか、あるいは関東とか、あるいは南東北とか、と同じような遺物しか出て来ないんですね。

で、多賀城の陸奥守・源頼義の側では、安倍氏を孤立させるために、裏側に手をまわして、一戸・二戸辺りの勢力に唾を付けようとする。

その史料が〔史⑤〕。「安倍頼時(頼良)」をやっつけるために、岩手県のさらに奥地。青森県の東半分を味方にするために、説得にかかる。

そこには、三行目。「鉦屋(かなや)」「仁土呂志(にとろし)」あるいは「宇曾利(うそり)」の三つの集団があって、「鉦屋」というのはどこかというところ、〔図⑤〕を見てください。②番の「爾薩体」というところの下に「鉦屋」。それから、「爾薩体」の上の方に「仁土呂志」。それから「宇曾利」は、今の恐山の宇曾利ですね。

「鉦屋」とか、あるいは「仁土呂志」とか、あるいは「宇曾利」には有力な集団が居て、現在の岩手県域で頑張っている安倍氏とは別個の独立した勢力だった。かれらを味方に付けて、安倍氏を挟み撃ちにしようということになったというわけですね。

あわてた安倍頼時は、七時雨峠を越えて、こっちまで来て、安倍富忠という現地の代表と話をしようとしたんですけども、待ち伏せにあって大けがをして、帰った後、死ぬんですね。

この安倍富忠をリーダーとする、「鉦屋」「仁土呂志」「宇曾利」の勢力っていうのは、以前に「爾薩体」「幣伊」「都母」の三つの集団が、独自の勢力を持っていたと同じように、海岸通りに展開していたんですね。

それに対して、1070年以降、この地域を日本国が治めるということになると、「仁土呂志」と

1057

三八三 (上略) 天喜五年秋九月、進國解言、上誅伐頼時之狀、傳、臣使金爲時下毛興重等、甘説奥地俘囚、令興重軍、於是鉦屋仁土呂志宇曾利合三都夷人安倍富忠爲首發兵、將從爲時、而頼時聞其計、自往陳利害、衆不過過三千人、富忠設伏兵一擊之、嶮岨、大戰二日、頼時爲流矢所中、還鳥海柵而死、

(陸奥話記)

【史⑤『陸奥話記』】

か「爾薩体」という、古い地名を取っ払って、代わりに、八戸道から入ってくる順番に即して、一戸、二戸、三戸、四戸、五戸、六戸、七戸と行って、戻って来て八戸、九戸という、新しい行政区をつくる。日本ではめずらしい行政区です。

何で、そういう行政区をつくったかと言うと、「戸(へ)」っていうのはですね。京都なんかの町で、一区画のことを「戸(へ)」っていうんです。それを持ってきたのですね。

糠部だけの特例です。他のところはね、例えば、鹿角は「鹿角郡」。あるいは、比内は「比内郡」。あるいは、津軽は「田舎郡」とか「鼻和郡」とかっていう名前をつけるんですけども、この地域だけは郡を立てない。多賀城の直轄領にする。それで、「戸」です。一戸から九戸まで、特別の行政区をつくって、そこの牧場で育てた馬を、多賀城を通して、京都まで運ぶ。そういうシステムができあがる。

だから、東北地方の中で、多賀城のある宮城郡にならんで、糠部。「糠部」っていえば、一戸から九戸。ここだけは、特別だって意識が室町時代の辺りにまで残るんですね。「しゅくこほり」っていうふうに言ってるんです。

9 九戸・四門の制とは

鎌倉時代に入りまして、この糠部は、鎌倉の、当時最高の実権を持っていた北条氏がまとめて支配をする。実際には、北条氏の家来だった横溝とか工藤とか、あるいは南部とか、いろいろな代官がやってきて、この地域を分割して治めるという格好になります。

〔史⑥〕の史料は、八戸の近くの四戸の八幡宮、今で言うところ「櫛引八幡宮」。あそこで、この地域最大のお祭りがあって、八月十五日に「放生会(ほうじょうえ)」っていうお祭りがあって、そこで「流鏝馬(やぶさめ)」があるんですけども。そこに各地域がこぞって費用を出すんですけども、順番がありますね。「一番 四戸、二番 八戸、三番 一戸、四番 二戸、五番 三戸、六番 五戸、七番 六戸、八番 七戸、九番 九戸」っていうふうに、これはお膝元の四戸が一番で、お隣の八戸が二番だから、順番は違ってますけども、並び直して見れば、一から九まで並びます。

それから、十番から十三番までは、「東門(かど)、西門、南門、北門」と言っ、これは糠部に入ってくる東・西・南・北の道の入り口のところ。例えば、「東の門」というのは種市。つまり、三陸の方から、海岸の方から入ってくる道。それから「西の門」っていうのはどこかかという、天台寺。つまり、七時雨峠からすぐに分かれてきたところ。それから、「南の門」

『南部家文書』 一三六八 櫛引八幡

〔四戸八幡宮神役張文案〕

定 四戸八幡宮毎年御放生会流鏝支配事付相僕并十烈士

一番 四戸 二、 八戸 三、 一戸 四、 二戸 五、 三戸 六、 五戸 七、 六戸 八、 七戸 九、 九戸 十、 東門 十一、 西門 十二、 南門 十三、 北門 十四、 四戸 十五、 八戸

右支配之旨、各可被勤仕也、若於令怠惰者、先規誰為七十五貫文、以寛宥之儀、并流鏝五貫相僕三貫十烈士

貫文科代、進社家、可備臨時之御祈禱料足、^{此分}尚以令違背者、於罪科之段者、追可有其沙汰之状如件

正平廿一年八月十五日 大膳権大夫在判

【史⑥「四戸八幡宮神役張文案(『南部家文書』)」】

永正五年馬焼印図云糠部郡九ヶ之内

撰用立少々

一ノ部七ヶ村之内印西印すくれたり、左右其雀皮之右印云々、盡別紙あり大馬、此両印雀(紫カ)伊之馬なるよし二説有、志かりといへとも忌心きよなり

桂清水村印かた車繪別紙ニ有、大馬有之

二ノ部七ヶ村とりやう印雀并二文字

乙女勘解由左衛門入道云仁、此印に馬に乗キノマこみをおわん、しやうくはんひるいなし、依ヨ之如ニ此ノ子細コれまてろくす、此印一天下之人賞翫すといふ也、

あひかひ印四ツ目結本主佐々木庶子号佐々木ノ部不知行

三ノ部七ヶ村印王文字并長文字金ほり及だつらさび是みなくろ馬と云、と、金等あいす印なり、すくれたる馬少々注之

河村印いほりの中のすちかへ

小袖印来文字すくれたり、但来文字別紙出之、河森田印来文字同前大馬有但繪圖同前

むへない印雀并百姓ほり祖印すくれたる馬少々注之かやもり印くわかた本文字此十文字もミんと印下品

あひない印来文字在有ニ文字すくれたり、吉馬おほく有之

泉山印目

四部印大略雀

河底印雀并松皮

繪図別紙に有之

大蔵印雀并松

五部印大略ひをさかさまにやく

ひあふき此等ハクろ馬也

いもい印すくれたるいほりのすちかへ

なくい印雀

石沢印かた車如此見繪圖領主佐藤方の印なり

中伊手印雀

またしけ印同

やうい印同

はねさき印雀三文字

六部印大略千鳥ひあふきくろ馬印なり

きさき八千疋の印有文字

七部印有ニ文字并雀吉一文字ひあふき

八部印へいん并大文字雀吉丸馬

めう野九千疋の印雀有ニ文字小十文字大十文字にはましたるなり

九部印雀
以上九ヶ部

【史⑦「永正五年馬焼印図（『古今要覧稿』）」】

ってのは九戸。山越えて入ってくる南方の道。それから、「北の門」っていうのは、どこかという、今の田子(たっこ)。田子から十和田湖を通して秋田の方へ行く、そういう道。

10 永正5年馬焼印図

それから、この地域に設営された官営牧場のリストです。「永正5年」（1508）という、室町時代の時期のものです。当時、この地域から獲れる馬はですね。鹿角、あるいは大館の辺りから、横手、庄内に出る。そこからは日本海岸っていうルートが多かったようなんです。平泉の時代には、七時雨峠を越えて岩手県、宮城県というルートが多かったと思うんですけども、室町時代には、大部分が日本海ルートで京都に行ったみたいなんですけども…。

この馬は一戸の牧の馬だとか、これは二戸だとかって、京都の人にはすぐに分かる…。なんで分かるかという、

〔図⑦〕にサンプルを示しましたが、左側の腰の辺りに、焼印をペタッと押すんです。

当時は、二才の牡馬を捕まえて、京都の方へ引っ張って行くわけですけども、その前に焼印を押す。

その焼印名のことを“ブランド”って言うんです。だから今は、海外ブランドなんかって言いますが、ブランドっていうのは本来は、馬の焼印のこと言うんです。

それが今は、商標一般のことをブランドっていうわけです。

その中の例えば、一戸の焼印は何を使っているかというところ、「両印」という、「雀」の焼印のマークを二つ押す。馬は可哀想ですね。一個でさえ熱くて大変なのに、二箇所も押されるんですけども、それが一番良い馬だと言われます。また、桂清水村ってところから、これは天台寺が桂清水なんですけど、その辺りの馬は特別に「かた車」っていう焼印。「かた車」ってのは、御所車の車輪の4分の1のようなマークであります。

二戸は、両印「雀」。あるいは「二」文字。「二」文字っていうのは、「一、二」の二の漢字の焼印をペタッと押す。二戸だから「二」って押す。しかし、あひかひというところでは、「四目結」という焼印を押す。これは、しぼり染めで結いつけて、このマークを出すから「四目結」というんですけども、近江源氏の佐々木氏の家紋なんです。二戸のあひかひは、北条氏の家来の佐々木氏が代官として治めていたので、その代官の家紋のマークです。

三戸は、王様の「王」っていう字。あるいは、「長」の一文字を押す。四戸は大略が「雀」。それから、五戸は「ひおうき」。「ひあふき」というのは、檜の大きな扇。他にも「いほりのすちかへ」とかありますし、名久井ってところでは「雀」のマーク。それから石沢ってところは、「かた車」。一般的には「雀」が多い。それから六戸の牧場は、多くは「千鳥」。あるいは「ひあふき」。

そして、いよいよ六ヶ所村の近くでありますけれども、「木崎の牧」という、大きな牧場がありまして、江戸時代の南部藩にもこの牧場があったんですけど、牧の中に何十もの村があるような巨大な牧場なんですけども、そこが「有」っていう文字。有り無しの「有」。

これが京都のですね。当時の町のにぎわいを描いた絵がありまして、中世の絵巻物。京都の千本という賑やかな通りに、「有」っていうブランドをした馬が歩いているのを描いていますから、相当有名だった…。

それから七戸は何かというと、やっぱり「有」の文字。それから、他に「雀」。それから「吉」という一文字。あるいは「丁」という一文字。ただし、黒馬は「ひあふき」。

それから八戸は、これはよく読めないんですけど、「大」っていう文字。ただし、里馬は「丸」あるいは「雀」ってマーク。そして、八戸の東の方に妙野って、今でもありますが、九千疋の馬、それが「雀」。または「有」って文字であります。それから、最後の九戸は「雀」。

ですから、この七戸のところ、もう一、二行書いてあって、たとえば「をぶち」…。なんて書いてあれば、もう、何にもいう事が無いんですけどね…。(笑) 本当に残念なんです…。いづれにしても、この「七戸の牧」の中に、「尾駮の牧」が生まれているはずなんです。



【図⑦「馬焼印図(サンプル)」】

11 まとめ

室町時代になりますと、糠部だけではなくて、その先、つまり久慈、あるいは今の宮古辺りま

でも、牧場が広がります。「田鎖」っていうのは、宮古のちょっと内陸の入った場所にある牧場なんですけども、その「田鎖の名馬」ってのはですね、室町将軍賞玩のブランド…でした。そこには、「雀」のマークがある。

その馬もね、どうやって行ったかという、やっぱり三陸海岸を久慈までに行って、八戸から四戸、三戸、二戸、一戸と来て、七時雨峠を越えて、あるいは日本海側に出て、京都まで行ったというふうに思うんです。

「雀」の焼印ってのは、すごく有名だったんですけども、その実物の金型が残ってます。一つは、十和田の「馬の博物館」。もう一つは、一戸のお城のあった場所から発掘で出て来ました。

大名の南部氏っていうのは、元々、三戸から出発して勢力を拡大するんです。そして津軽一帯を勢力に収めるのにあわせて、それから閉伊郡を下って遠野辺りまで行く。

もちろん、途中の鹿角、あるいは大館・比内は、勢力下に入るんですけども、「七時雨峠」を越えて、盛岡の方にはなかなか出て行けない。最後の最後までになって、ようやく岩手郡とか、あるいは、本当の最後の最後に、今の花巻辺りまで行くんですけども。本来は、南部氏というのは、津軽海峡を挟んで、むしろ、北海道の方にも勢力を伸ばしているような、そういう北奥羽の大名なんですね。

南部氏が、どうしてあれだけの勢力を拡大できたかという、元々、北奥羽には共通の民間の物流のルートがあって、それが、そっくりそのまま、南部氏の勢力の基盤になった。そのようなベースの基に、南部氏っていう大名が成長するということが分かります。

そして、「天台寺」。あのお寺は、江戸時代には、東の方は八戸の方、それから北は、青森県の碓ヶ関の辺りまで含めて、「天台寺詣」って、大勢の人びとがやってきたのですね…。だから、天台寺は、北奥最大の人々の信仰の拠り所だったのですね。いまでも、瀬戸内寂聴さんの説法が有名ですね。

要するに、日本国側が「七時雨山峠」を越えて、北奥世界に乗り込んでくる時に、最初に、その取っ付きのところに造った、そういうお寺なんですね。私も、何遍も行ったんですけども、良いところですよ。

最後に、「糠部の駿馬」という言葉は、私も論文の名前で使ったりしていますが、元々は、平泉まで七時雨峠を越えて引っ張って行かれたこちらの馬が、それがそのまま、京都を目指した時に、「糠部の駿馬」って呼んで賞賛されたのでした。

それらにつけても、物流のルートは大事ですよ。民間ベースでの物流の海の道二種類と、陸の道。その陸の道っていうのは政治的な、七時雨峠越えの特別なルートなんですけれども、そういうものが関連しあう、その中で、「糠部の駿馬」。あるいは、「尾駁の牧」。あるいは、それにまつわるような、今日、説明のあったような緑釉陶器とか、そういうものの存在が浮かび上がってくるのかな…ということでございます。これが、今の段階で言える、取りあえずの結論かな…と。

すなわち、物流、あるいは交易って場合にも、そういうふうに種類があって、その種類の中で、ちゃんと見直して行くことが必要である。その中でも特に大事なことは、民間レベルでの商人、あるいはお坊さんたちの活躍が、まず最初にあったのですね。

例えば、東アジア世界にヨーロッパのスペインとか、ポルトガルとかオランダが入ってくる時

にも、いきなりスペインとかオランダの政治勢力がやって来たわけではないんで、最初は、宣教師とか商人なんですよ。ですから、最初はどんな片田舎でも、やっぱり乗り込んでくるのは、商人やお坊さん。その上にたって、ある程度、唾が付いたところで、政治というものが乗り出してくるという、順番を間違えてはいけないのかなというふうに、思う次第でございます。

以上、ご静聴ありがとうございました。

(大拍手)